

# 福井県立美術館

研究紀要 第16号

Bulletin of Fukui Fine Arts Museum

vol. 16. 2025



研究紀要 第16号

Bulletin of Fukui Fine Arts Museum

vol. 16. 2025

目次 : Contents

〈修理報告〉

【令和六年度収藏品修理報告】絹本着色「羅漢図」(二幅)

..... 2

〈所蔵品紹介〉

越前若狭を描いた浮世絵～現地調査報告～

福井県立美術館 原田 礼帆

福井県立歴史博物館 伊藤 大生..... 8

# 〔修理報告〕令和六年度収蔵品修理報告〔絹本着色〕羅漢図〔二幅〕

施工 株式会社 坂田墨珠堂  
編集 田中 亜季

令和六年度、福井県立美術館が所蔵する絹本着色「羅漢図」二幅の（以下、本作）の解体修理を行った。本作は松平家伝来品と確認できしており、昭和六十三年度に当館へ収蔵されたものである。室町時代、十五世紀の制作とされ、十六羅漢のうち第六尊者の跋陀羅尊者と第十尊者の半託迦尊者を一幅につき一尊者を描いており、元は十六幅あったと推測される。本作は松平家伝来ということもあり、福井に残る仏画の名品だが、折損や料絹剥離をはじめ経年による劣化が著しい状況で今後も劣化の進行が懸念される状況にあった。そのため一カ年による修理を行うこととした。

施工者による修理報告書に基づき、その修理工程を略記する。

## 作品概要

作品名 羅漢図  
作者 不詳  
員数 跋陀羅尊者 一幅  
半託迦尊者 一幅  
時代 十五世紀・室町時代  
材質技法 絹本着色  
表装 幢補一文字廻し三段表具  
法量（センチメートル）

（跋陀羅尊者） 修理前本紙 縦一〇二・九×横四五・三

修理前表具 縦一九六・七×横五七・三

修理後本紙 縦一〇二・五×横四五・〇

修理後表具 縦一九四・八×横五七・〇

（半託迦尊者） 修理前本紙 縦一〇二・八×横四五・三

修理前表具 縦一九六・四×横五七・五

修理後本紙 縦一〇二・八×横四五・二

修理後表具 縦一九五・七×横五七・三五

施工者 株式会社 坂田墨珠堂

施工期間 令和六年四月十一日～令和七年三月二十七日

## 修理前状況・修理方針

二幅に共通する損傷として、全体的な折損や料絹剥離などの一般的な経年劣化が見られた。また、経年による付着物や汚れ、絵具の膠着力低下による剥落、表装裂の傷みも生じていた。さらに過去の過度な修理も認められ、各尊者の肉身の大部分において料絹欠失が甚大であり、広範囲にわたり補修絹が施されていた（修理過程で徐々に明らかになった内容については後に記す）。

本修理ではオリジナル部分の保存を基本としながらも、右記損傷を改善するため、裏打ち紙の交換をはじめとした本格解体修理を実施することとした。なお、風帯裏裂をのぞく表装裂と象牙軸首は再使用し、上下軸木、座鑲、紐、太巻、保存箱は新調とした。

## 修理工程

- ① 修理前調査、記録撮影
- ② 本紙料絹断片、絵具層の不安定な部分の養生
- ③ 表具の解体
- ④ 本紙汚れ除去（乾式クリーニング）
- ⑤ 剥落止め
- ⑥ 旧裏打ち紙（総裏紙）除去
- ⑦ 本紙汚れ除去（湿式クリーニング）
- ⑧ 仮裏打ち・剥落止め
- ⑨ 表打ち・画面保護
- ⑩ 裏打ち紙選定・染織調整

- ⑪旧肌裏紙除去（乾式肌上げ法）
- ⑫作品裏面調査
- ⑬旧補修絹除去
- ⑭本紙料絹欠失箇所補修絹補填
- ⑮表装裂湿式クリーニング、肌裏紙打ち替え、ほつれ止め
- ⑯肌裏打ち
- ⑰増裏打ち
- ⑱補填した補修絹補彩
- ⑲折伏入れ
- ⑳再使用の表装裂接合
- ㉑中裏打ち
- ㉒総裏打ち
- ㉓本紙仮張り、乾燥
- ㉔補填した補修絹の補彩最終調整
- ㉕軸装仕立て
- ㉖太巻、保存箱、袱紗、四方帙の新調
- ㉗修理後記録、調査
- ㉘修理報告書作成

さて、右記工程による修理中に旧修理の状況が明らかになったため、簡潔に記しておく。

両幅とも水溶性染料や裏面からの色調正が施されていることが判明し、オリジナル・加筆箇所どちらにも影響が認められた。まず、画面全体には黄色またはオレンジ色の水溶性染料が染み込まされており、色が大幅に調整されていた。また、肌裏紙の接着に使用された色糊（染料を含んだ澱粉糊）、水溶性染料で着色された肌裏紙・増裏紙により、裏側からの色調整も施されていた。跋陀羅尊者においては、旧総裏紙の作品部分にあたる全体がピンク色に染まっており、肌裏紙もしくは増裏紙に使用された水溶性染料が、裏打ち作業中に滲み出てあらわれたと推測される。半託迦尊者の赤い衣には、部分的に補彩が施されており、

水に非常に不安定なため旧総裏紙に染みていた。これら色材については、修理中の水分によりしみなど汚染が広がる可能性が高く、経年で変色する恐れもあった。そのため協議の上、これら色材が滲まなくなるまで除去する方針とした。

補修絹と加筆の状況については、両幅とも尊者肉身部は広範囲にわたり補修絹が補填されていた。また、加筆修正による調整もみとめられ、オリジナル部分との境界が判別困難となっていた。跋陀羅尊者は肉身部の料絹はほとんど欠失しており、加筆された補修絹に置き換わっていた。補修絹表面にはオリジナルの断片が残存する箇所もあったが、加筆により境目の判別は難しい状況であった。また、虎の後頭部や足元、尊者の衣の白い線、上部の樹木の花も同様である。半託迦尊者については、尊者・従者肉身部、尊者衣の白色や赤色部分に細かい料絹欠失が多数認められ、これらを裏側から纏めて覆う形で補修絹が補填されていた。また、補修箇所の加筆は中世の絵具には見られないマットな質感が見られた。

修理前調査時点で加筆された補修絹のことは認識しており、絵画表現を維持するために加筆補修絹はすべて温存し、保存上問題のある重なった部分のみを除去する方針としていた。しかし、旧裏紙除去後に旧補修を確認したところ、修理前の認識よりも広範囲で補修絹が重なっていることが判明した。さらに旧補修裏側の色は表側に比べて変色が進行している可能性があり、将来的には表側にも影響を及ぼし鑑賞にも妨げる可能性が考えられた。また、先述のとおり、肌裏紙の染色や加筆など過去の過度な修理が施されていたこともあり、予測できない変化の可能性も孕んでいた。そこで補修絹で変色の可能性がある場合、絵画表現に影響の少ない部分については除去する方針とした。



【图3】跋陀羅尊者修理後



【图1】跋陀羅尊者修理前



【图4】跋陀羅尊者修理後本紙



【图2】跋陀羅尊者修理前本紙



【図7】半託迦尊者修理後



【図5】半託迦尊者修理前



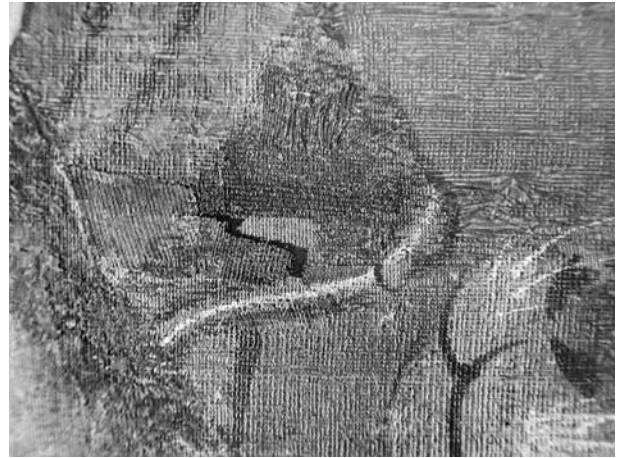
【図8】半託迦尊者修理後本紙



【図6】半託迦尊者修理前本紙



【図10】跋陀羅尊者修理後(部分)



【図9】跋陀羅尊者修理前(部分)  
本紙料絹の剥離



【図12】跋陀羅尊者修理後(部分)



【図11】跋陀羅尊者修理前(部分)  
加筆された補修絹の上に作品断片残存



【図14】半託迦尊者修理後(部分)



【図13】半託迦尊者修理前(部分)  
加筆された補修絹の上に作品料絹残存

註

1 『舊越前福井城主松平侯爵家御藏品入札目録』東京美術倶楽部、昭和四  
（一九二九）年。

2 前掲註1の中で「二〇 兆殿司 愛龍 愛虎 二幅對 豎三尺四寸二分 巾一  
尺五寸」と記載。

（たなか あき・福井県立美術館）

# 〈所蔵品紹介〉越前若狭を描いた浮世絵く現地調査報告く

福井県立美術館 原田 礼帆  
福井県立歴史博物館 伊藤 大生

はじめに

令和七（二〇二五）年四月十一日から五月十一日にかけて、当館のテーマ展として「ワンダー☆浮世☆ランド」展を開催した。本展では浮世絵の始まりから、最盛期を経て地方へと広がっていった様子を福井に由来する題材を交えて展覧し、多くの来館者から反響を得た。本稿では展覧会より、現福井県域の旧国にあたる越前と若狭を題材にする浮世絵を対象として、令和七（二〇二五）年三月二十八日、三十日に行った現地調査結果を報告する。

## 現地調査の概要と背景

本調査では、浮世絵の画題となった各地の景観について、現地に訪れて現在の景観を把握し、描かれた景観と実際の景観との対比を行った。対比に際しては、過去から現在までの景観変容も考慮し、絵図や地形図などから過去の景観も把握することに留意した。本調査および報告においては、浮世絵の美術史的分析を原田礼帆が担当し、現在および過去の景観についての分析を伊藤大生が担当した。対象とした浮世絵は、福井県立美術館の所蔵する九図と、福井県立歴史博物館が所蔵する一図である【表】【調査地】。

越前若狭を題材とした浮世絵は「東海道五十三次」のような著名な作例でないこともあり、これまでまとまった検証がなされてこなかった<sup>1</sup>。浮世絵は多くの場合が現地を訪れること無く描かれたとされる。しかし、絵師自身が現地を訪れていなかったとしても、全くの想像ではなく、何らかの先行資料を参考にして諸国を描く場合もあったことが想定される。歌川広重の作品には既に種本が指摘されているものが多くあり、複数の資料を制作の参考に使っていたことが分かっている<sup>2</sup>。それらの資料の中には著名な版本以外にも当地在住の絵師の作例や、実際に当地を訪れた人物の紀行文、絵図などが含まれていた可能性が推察される。そこで、それぞれの作品と現地とを比較することで、種本となった

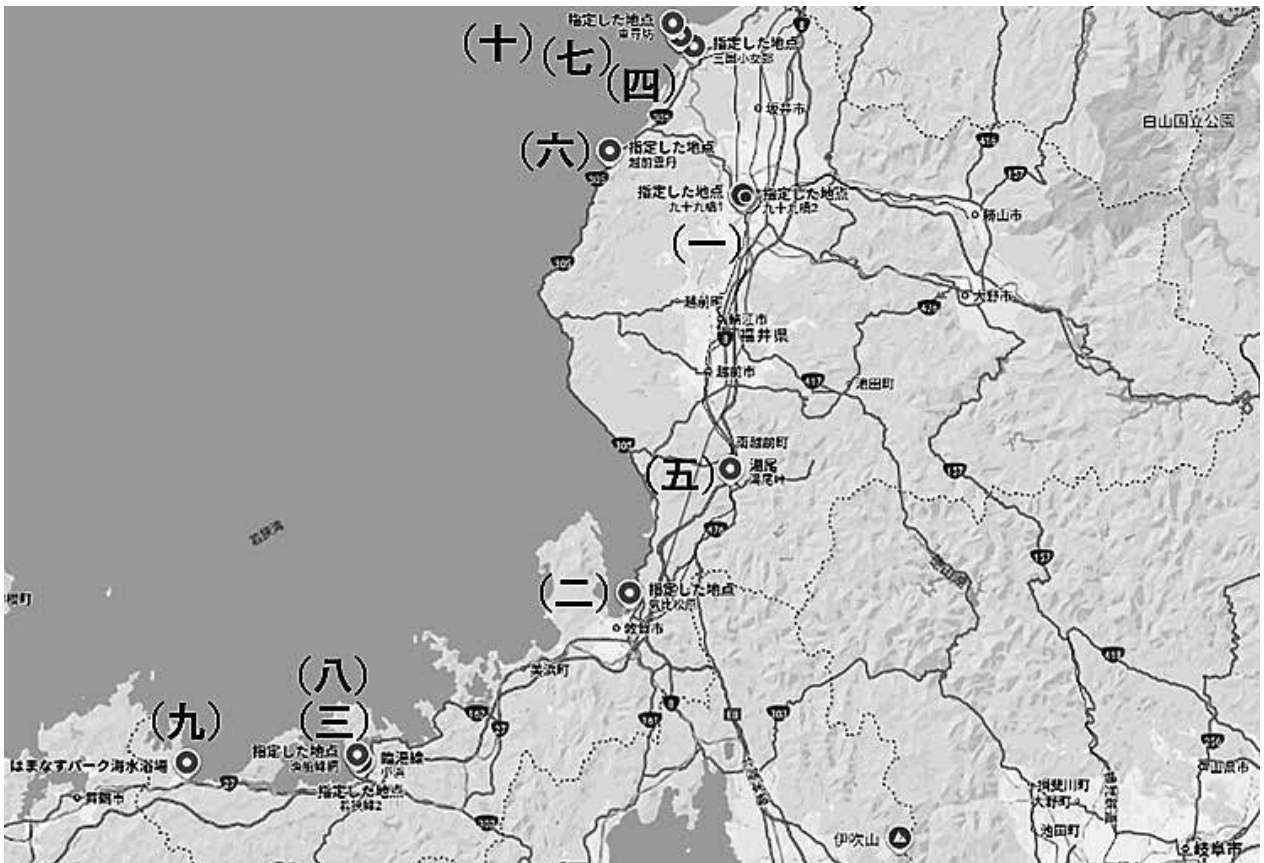
当時の資料を考察する一助になると考えた。

また、阿倍美香氏は歌川広重の浮世絵について、先行研究において形式的な要素が指摘されているとしつつも「当時の「名所」として当然描かれてしかるべき場所が描かれていない」一方で「到底「名所」とは言えないような場所」が取り上げられているという指摘を重要視し、「浮世絵風景画が、当時の文化を反映し、文化としての風景を写し出したものとして評価しうる」と論じている<sup>3</sup>。浮世絵を通して越前若狭を見つめ直すことで、当時の景観の様相のみならず、当時の人々にとって名所とはどこかといった、空間認知の在り方を紐解いてくことが期待される。

なお、今回は現地調査が主眼となり、作品が描かれた当時の状況や種本の調査までは至らなかったが、本稿が今後の所蔵品研究を深化させる第一歩となれば幸いである。

【表】

番号	作品名	調査場所
(一)	葛飾北斎《諸国名橋奇覧 ちぢぜんふくみの橋》	九十九橋（福井市中央三丁目周辺）
(二)	歌川広重《六十余州名所図絵 越前敦賀気比ノ松原》	天筒山展望台
(三)	歌川広重《六十余州名所図会 若狭 漁舟鰈網》	小浜漁港周辺
(四)	歌川広重《山海見立相撲 越前三国》	三国サンセットビーチ周辺
(五)	歌川広重《山海見立相撲 越前湯之尾峠》	湯尾峠・湯尾側登り口
(六)	歌川広重《北陸道七ヶ国（一）》	長橋漁港周辺
(七)	歌川広重（二代）《諸国名所百景 越前三国乃大湊》	三国サンセットビーチ周辺
(八)	歌川広重（二代）《諸国名所百景 若狭かれを制す》	小浜 マーメイドテラス周辺
(九)	歌川広重（二代）《諸国六十八景 若狭松尾山》	はまなすパーク海水浴場周辺
(十)	歌川広重（二代）《諸国六十八景 越前等侶坊》	東尋坊 三好達治文学碑周辺



【調査地】

(一) 葛飾北斎《諸国名橋奇覽 ちぢぜんふくの橋》【図一】

一面 木版色摺 天保四(一八三三)〜三(一八三三)年

福井県立美術館蔵

『諸国名橋奇覽』は、葛飾北斎(一七六九〜一八四九)が十一橋を描いた揃物。落款は「前北斎为一筆」。描かれた橋の中には「三河の八ッ橋」など、当時実在していない伝説上の橋もあることから、実在如何に関わらず、著名な橋を取り上げていることが分かる。当時の九十九橋は半石半木、すなわち半分が石造、半分が木造の特殊な構造であり、全国的にも珍しい橋として大変有名であったことがうかがわれる。

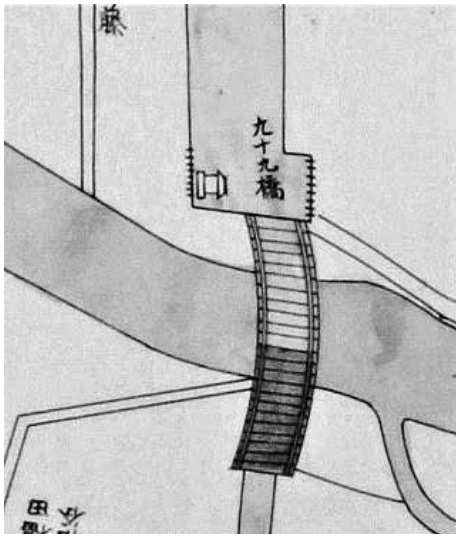
福井城下を描いた宝暦期(一七五一〜一七六三年)頃の絵図でも、半石半木の九十九橋が確認できる【図二】。また、この絵図からは、九十九橋以外の橋がなかったことが分かる。文久二(一八六二)年頃に由利公正の発議によって幸橋が架橋される<sup>4</sup>まで、福井城下で足羽川を渡る橋は九十九橋のみであったと考えられる。そのため、街道でもあった九十九橋には多くの人の往来があった。また、橋のたもとは川船の船着場があったことで、さまざまな人や物資が集まった。このように多くの人が往来したり集まったりする橋であったことが、九十九橋の知名度を高める一要因であったと推察できる。半石半木であった理由は複数の説があるが、その姿は明治四十二(一九〇九)年に橋脚を除き全て木造の橋に架け替えられるまで続いた<sup>5</sup>。

九十九橋は福井城側が木造、足羽山側が石造であった。本作では画面手前が石造であるため、そのまま見れば画面奥が城下であると考えられる。しかし現地を調査したところ、九十九橋周辺からは遠景に描かれたような大きな山は確認できない【図三】。また、遠景の川岸には紙を木の板に貼り付けて乾かしている様子が描かれているが、実際にこの場所で紙漉きをしていた記録は無い。そのため、これも事実とは異なる。景物として紙の干乾しが描かれているのは、和紙が九十九橋と同じく越前を象徴するものであったためであろう。平瀬徹斎編にて宝暦四(一七五四)年初版、寛政九(一七九七)年に再版された『日本山海名物図会』には、九十九橋の次の頁に越前和紙が記載されている。また、

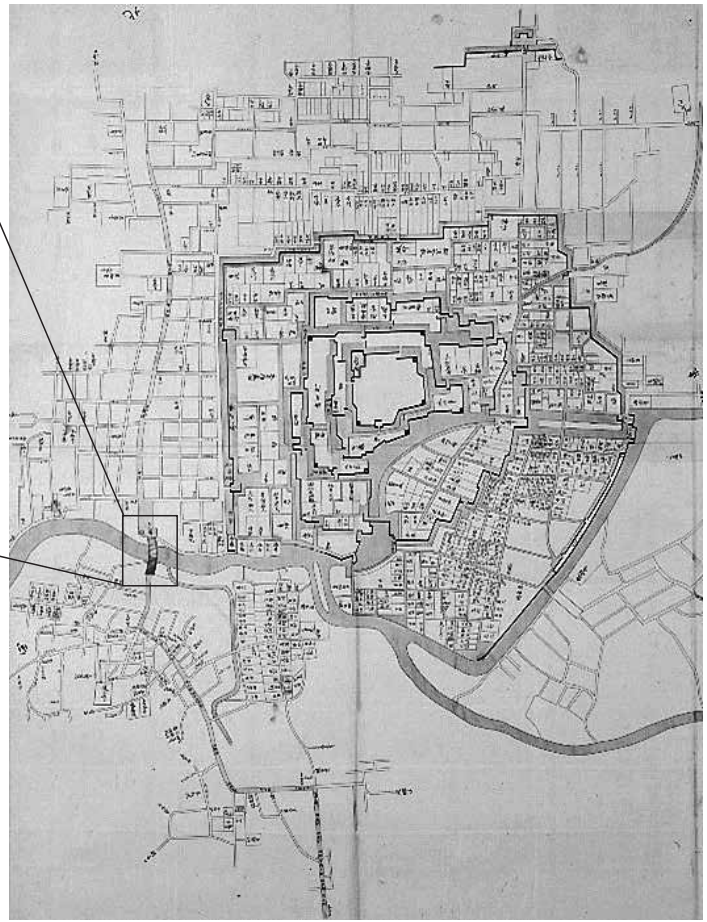
文政十(一八二七)年に佐藤信淵が著した『経済要録』において越前和紙は「日本第一」と称された。  
本作は、北斎が実際に福井に来て描いた作品ではないが、半石半木の九十九橋と越前和紙が、江戸の人々にも越前を彷彿とさせる名物として知られていたことが見えてくる。

【図二】





(九十九橋部分拡大)



【図二】福井城下絵図写 宝暦期(一七五一〜一六三頃)

福井県立歴史博物館蔵



【図三】現在の様子

(令和七(二〇二五)年三月三十日伊藤大生撮影)

(二) 歌川広重《六十余州名所図繪 越前敦賀気比ノ松原》【図四】

一面 木版色摺 嘉永六（安政三）一八五三（五六）年

福井県立美術館蔵

『六十余州名所図繪』は、初代歌川広重（一七九七～一八五八）が五畿七道の六十八国に江戸と目録を加えた計七十枚からなる大作。越前若狭は七道のうち北陸道にあたり「越前 敦賀気比ノ松原」と「若狭 漁舟鰈網」の二面が描かれている。それぞれの土地を象徴する名所を俯瞰的にとらえた構図によって、鑑賞者に現地の光景をありありと想像させる。広重ならではの斬新な画風は、図絵として楽しまれるとともに、旅心を刺激した。

本作では、湾の沿岸部に松原が確認できる。明治二六（一八九三）年の地形図からも、港が位置する東岸部は宅地化が進んでいるものの、西岸部には針葉樹林、すなわち松原が本作と同様に広がっていることが分かる【図五】。こうした松原の景観は、江戸時代から大きく変わっていないことがうかがえ、現在

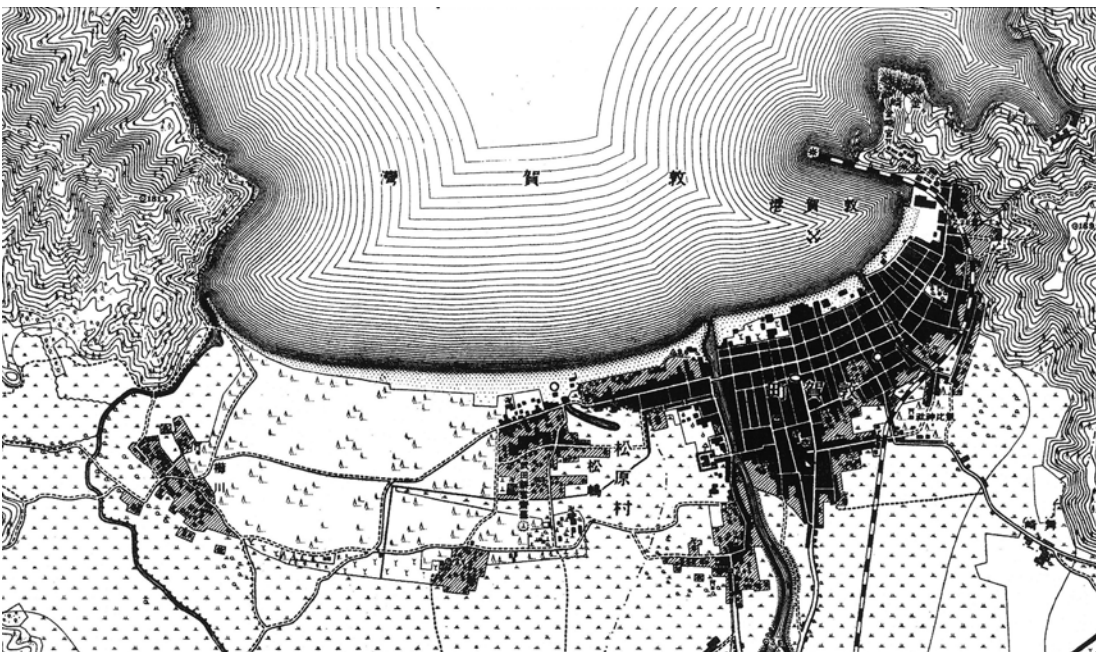
【図四】



でもなおその面影を残していると言える【図六】。

【図五】二万分一地形図「敦賀」部分 明治二六（一八九三）年測量

福井県立歴史博物館蔵



【図六】現在の様子（天筒山展望台からみた敦賀港）（写真提供：敦賀市）



【三】歌川広重《六十余州名所図会 若狭 漁舟鰈網》【図七】

一面 木版色摺 嘉永六（一八五三）安政三（一八五三）五六）年

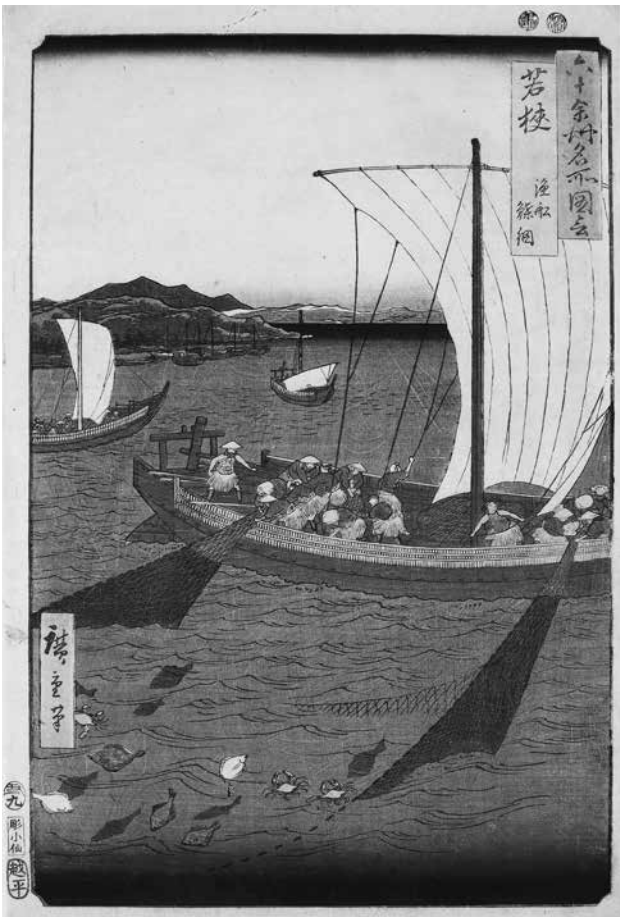
福井県立歴史博物館蔵

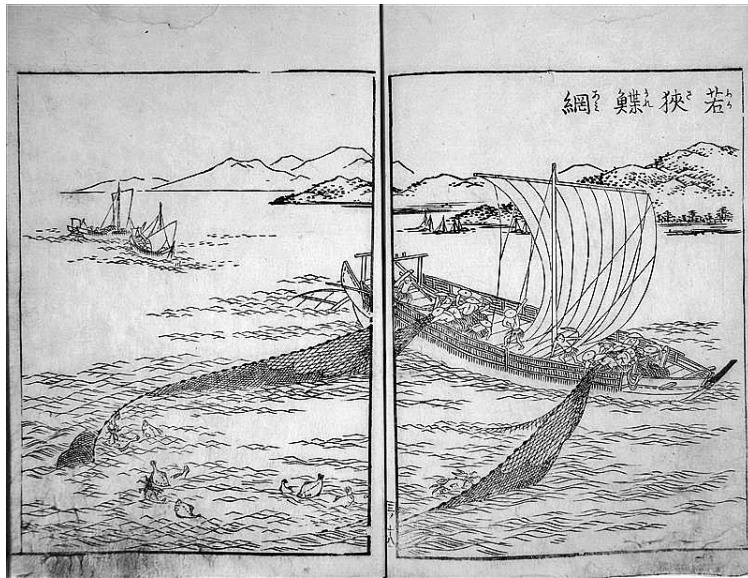
「越前 敦賀気比ノ松原」に続き、若狭からは「漁舟鰈網」が選ばれた。若狭は御食国として古代から有名であり、特に鰈で知られていた。寛政十一（一七九九）年に木村孔恭（兼葭堂）著にて発刊された『日本山海名産図会』には、

本作と同様に船から網を出す絵が掲載されている【図八】。しかし、若狭では「大敷網漁」と「手繰網漁」が広く普及した<sup>6</sup>ものの、鰈とりの「打瀬網」が曳かれたことを示す史料は確認できないため、現地での写生ではなく、他所の漁労の様子を写したものとされる<sup>7</sup>。

若狭湾では、暖流と寒流によって、多種多様な海産物や豊富なプランクトンがもたらされるとともに、沿岸部は岬や入江の多いリアス海岸で天然の良港でもあったことから、好漁場として漁業が盛んに行われてきた<sup>8</sup>。本作にも様々な海産物が捕獲されている様子や、岬や入江の向こうに山が連なるリアス海岸の地形の特徴が表現されている。明治二十六（一八九三）年の地形図からは、河口部分に港が確認でき【図九】、また現地でも港や湾の西側に山地が確認できる【図十】。漁労の様子は実際とは異なるものの、好漁場としてのイメージや、河口近辺からの景観においては、本作と現地の様子は類似するものと考えられる。

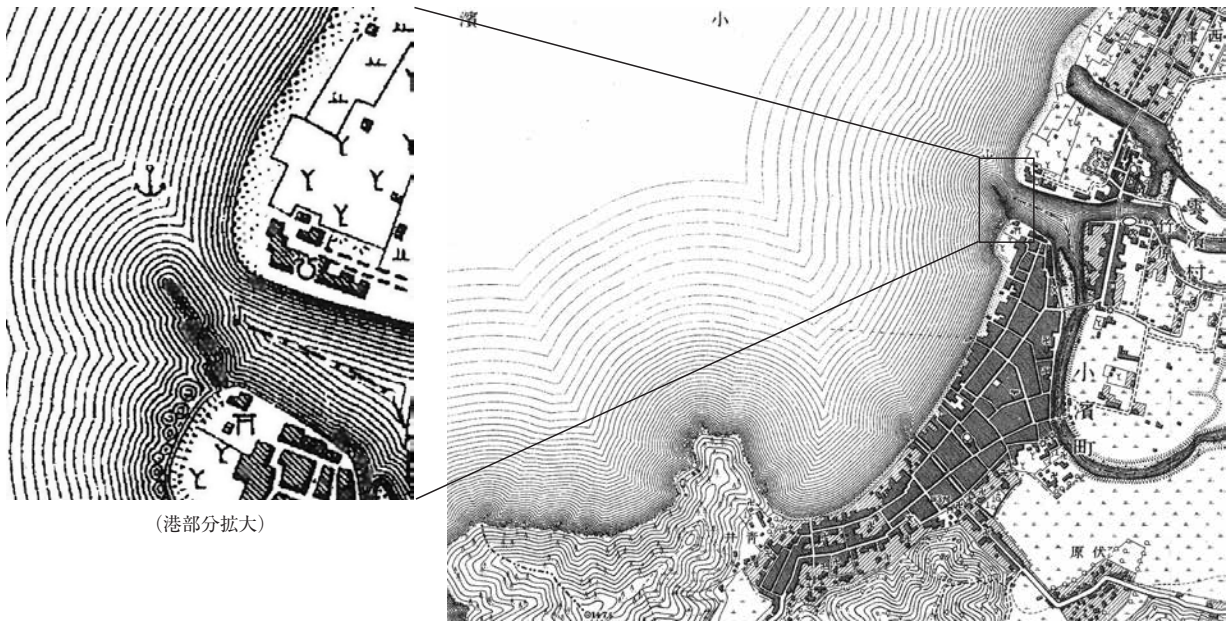
【図七】





【図八】木村孔恭（兼霞堂）／蒔月画『日本山海名産図会』卷之三  
若狭鰯網（寛政十一（一七九九）年初版、全五冊）

福井県立歴史博物館蔵



【図九】二万分一地形図「小濱」(部分) 明治二六（一八九三）年測量

福井県立歴史博物館蔵



【図十】現在の様子

（令和七（二〇二五）年三月二十八日伊藤大生撮影）

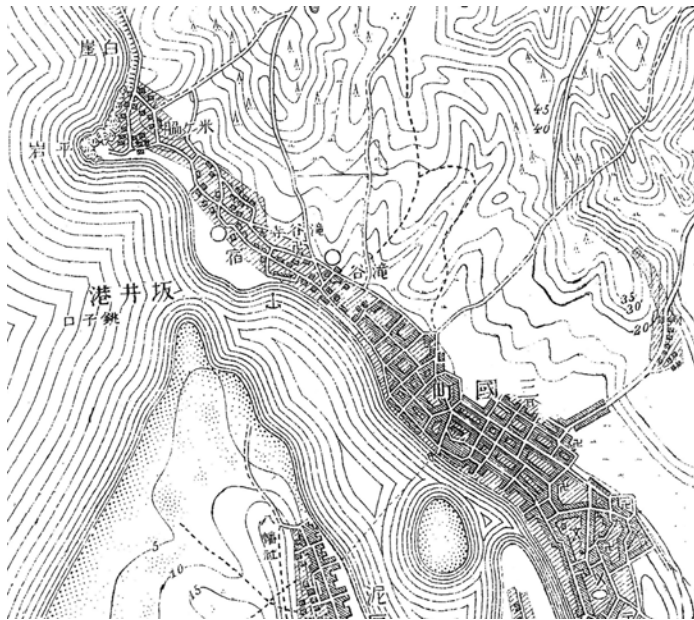
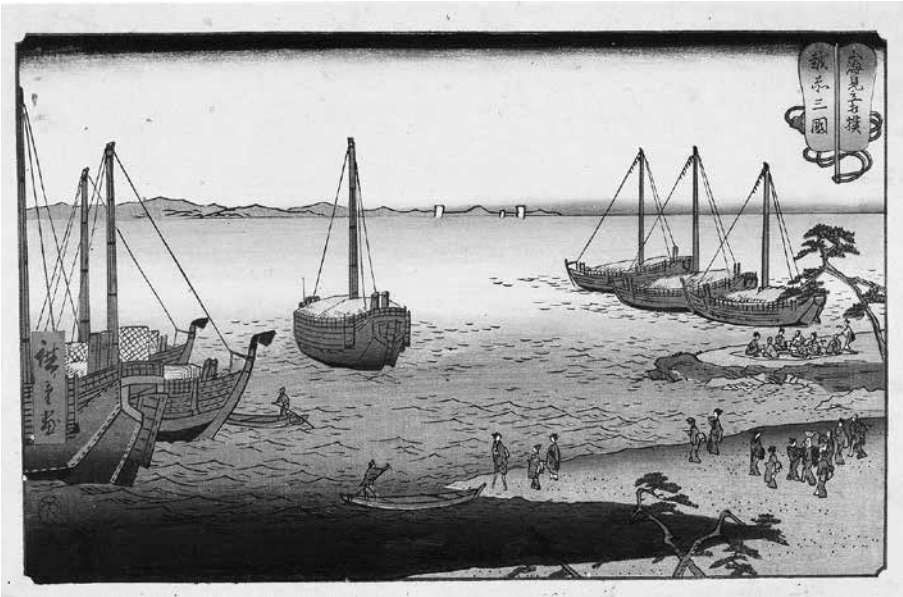
〔四〕歌川広重《山海見立相撲 越前三国》〔図十二〕

一面 木版色摺 安政五（一八五八）年

福井県立美術館蔵

『山海見立相撲』は、広重が最晩年に全国の名所二十カ所を描いた作品。相撲の行司の持つ軍配の絵柄の中に各題が書かれている。「山」と「海」をテーマに、それぞれ十カ所ずつが選出される中、「海」では「越前三国」、「山」では「湯之尾峠」

〔図十二〕



〔図十二〕二万分一地形図「三国町」(部分)

明治三二（一八九九）年修正

福井県立歴史博物館蔵

が選ばれた。

江戸時代に発展した「見立て」とは、あるものを全く別の何かになぞらえて表現する方法で、本作のように相撲に見立てて様々なものを競わせたり、順位付けしたりして楽しむなど、知的、文学的に趣向を凝らした作品に用いられる。本図もその一つと言えよう。

三国は、県下最大規模の河川である九頭竜川の河口に位置し、川に沿うように町が形成されている。河口は川と海が面していることから、川船のほか北前

〔図十三〕現在の様子（令和七（二〇二五）年三月二十八日伊藤大生撮影）



船などの海船が発着する場所であった。そのため、三国には多くの人や物資が集まった。

本作には、船が砂浜に到着する様子が描かれている。明治三十二（一八九九）年の地形図からは、宿集落付近に砂浜が広がっていることが分かり【図十二】、また現地でも本作と同様に海に向こうに山の連なりが確認できることから【図十三】、この場所が浮世絵に近い景観であったと考えられる。後述するが、同地を二代広重も描いており、初代とは異なる視点が注目される。

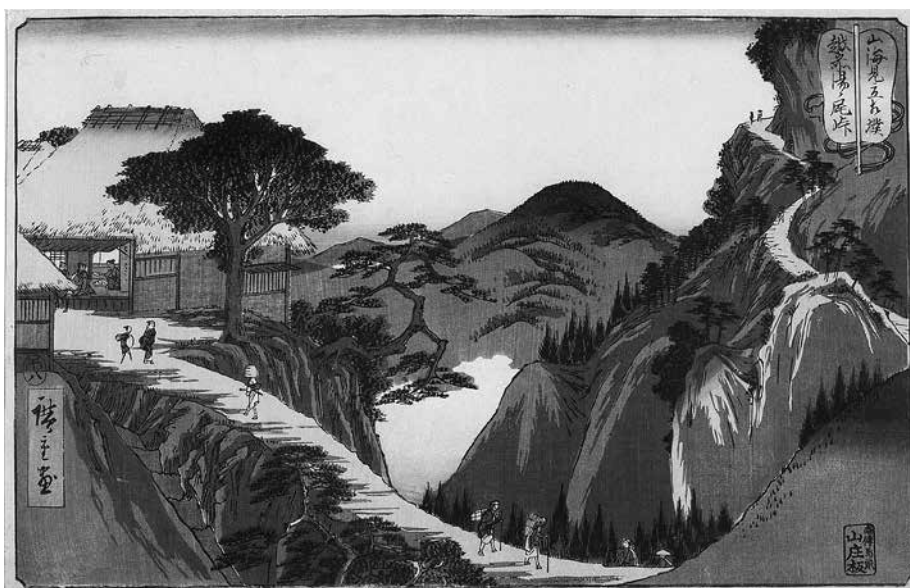
〔五〕歌川広重《山海見立相撲 越前湯之尾峠》【図十四】

一面 木版色摺 安政五（一八五八）年  
福井県立美術館蔵

『山海見立相撲』のうち、越前の山を描く。《山海見立相撲 越前三国》【図十一】と対になり、本作では国同士を戦わせるのではなく、それぞれの国の山の山と海を戦わせていることが特徴と言える。

湯尾峠は湯尾村の南方の山中に位置する峠で、『太平記』にも記述が確認できるなど、古くから交通上の要地であった<sup>9</sup>。文化十二（一八一五）年に完成した地誌である『越前国名蹟考』によると、道中に峠茶屋が四軒あった<sup>10</sup>。明治四（一八七二）年の湯尾村を描いた絵図からも、山間部を縫うように伸びている峠道に沿って四軒の家屋があることを確認できる【図十五】。明治時代以降、鉄道の開通や自動車の普及に伴い、峠を往来する人は減ったものの、現在では登山道として整備されており、現地でも浮世絵と同様山中に伸びる二股道が確認できる【図十六】。

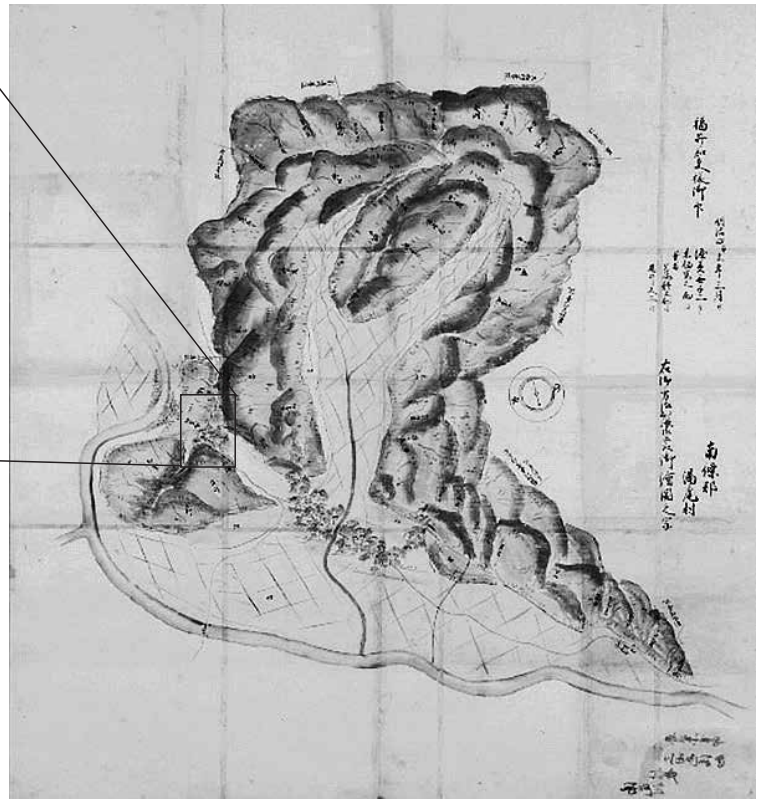
前田詩織氏により本図は享和三（一八〇三）年に親鸞の二十四人の高弟の旧跡巡礼の案内書として発刊された『二十四輩順拝図会』に着想を得ていることが指摘された<sup>11</sup>。茶屋の様子や二股に分かれた道などがよく示されており、当時は名の知れた場所であったことがうかがわれる。



【図十四】



(峠茶屋部分拡大)



【図十五】湯尾村絵図写 明治四（一八七二）年

福井県立歴史博物館蔵



【図十六】現在の様子（令和七（二〇二五）年三月二十八日原田礼帆撮影）

〔六〕歌川広重《北陸道七ヶ国》〔図十七〕

一面 木版色摺 嘉永五（一八五二）年

福井県立美術館蔵

『北陸道七ヶ国』は、広重が五畿七道を描いた『国尽張交図会』のうち北陸道七ヶ国を描いたもので、それぞれの国の名物を二枚に渡って表しており、名物を強調して紹介する擦物である。

（一）には、若狭の干鰯、越前の雲丹取り、加賀の安宅関の武蔵坊弁慶、能登の日和山を望む九十九湾が描かれる。各名物は長方形や、猪目の枠に収められている。また（二）には越中の滑川の大蛸、越後の新潟踊、佐渡の佐渡島が描かれており、佐渡島を扇型に入れる。他面も同様に、長方形と変形の枠を用いており、ただ国の名所を描くのではなく、楽しく諸国を描く手法が駆使されていると言える。

〔図十七〕



江戸時代の越前の雲丹は名物として知られていた。産地の一つである越前海岸沿いの南菅生浦・北菅生浦・長橋浦の各村では、毎年夏に福井藩の御料理方が雲丹の調製に訪れ、村人はこれに従事したと言う<sup>12</sup>。本作では、干潟で雲丹を取っている様子が描かれているが、現地は岩石海岸で干潟はなく〔図十八〕、明治四十二（一九〇九）年の地形図でも現在と同様の地形であったことが見て取れる〔図十九〕。

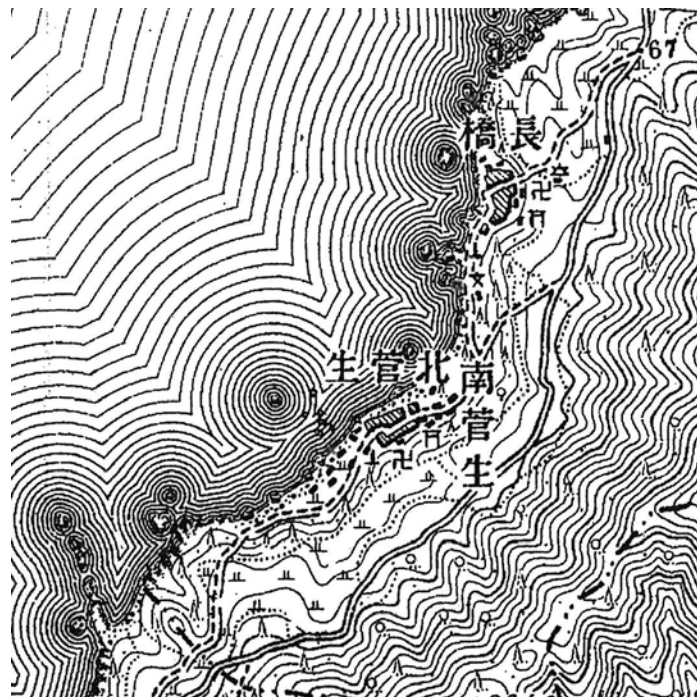
〔図十八〕現在の様子（令和七（二〇二五）年三月三十日原田礼帆撮影）



前述の『日本山海名産図会』には本作に近い雲丹取りの様子が掲載されているが、同地の漁法は干潟で雲丹を取るのではなく、海女が潜水で捕獲するものであった。《六十余州名所図会 若狭 漁舟罾網》【図七】と同じく他所の様子を写したものと論じられている<sup>13</sup>。

【図十九】五万分一地形図「福井」(部分) 明治四十二(一九〇九)年測量

福井県立歴史博物館蔵



(七) 歌川広重(二代) 《諸国名所百景 越前三国乃大湊》【図二十】

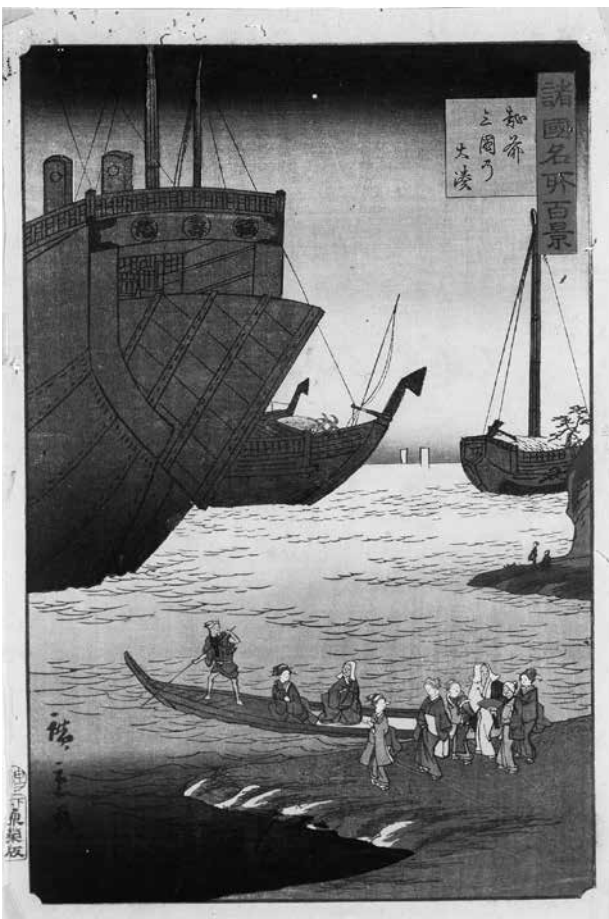
一面 木版色摺 安政六(一八五九)年

福井県立美術館蔵

歌川広重(二代)は初代広重の門人で、本名は森田鎮平(一八二六〜六九)。広重の画法を継ぎ、名所図を得意とした。本作は、諸国の名所を百景連作として描くことを目指したものの、百図は完成しなかったと考えられおり、現在八十一図が確認されている。越前若狭からは「越前の三国」と「若狭の罾」が選出された。

本作は、初代広重をも超えるような大胆な構図で各地の名所が描かれている点特徴的である。中でも、本作のように画面手前もしくは中央にその土地を象徴する名物を大きく描き、圧巻の迫力でそれぞれの土地の魅力を伝えた作例が多い。初代広重の養女・お辰と結婚し、二代目を襲名した翌年から制作を始めた連作において、二代目の名に恥じぬよう渾身の力作として本作を描いてい

【図二十】



た背景が推察される。二代広重は、明治二（一八六九）年まで生き、激動の幕末の中で外国人向けの横浜絵なども描きながら、歌川派の画風を後世に伝えた。

初代広重が同じ三国を描いた《山海見立相撲 越前三国》【図十一】と比較すると、相違点として、船の大きさのみならず、初代広重の作では右奥にも砂浜と思しき土地が見える一方で、本作では奥に岸壁が描かれている点が指摘できる。明治三十二（一八九九）年の地形図【図二二】や現地調査【図二十一】からは、宿集落の北西の平岩集落あたりに砂浜と崖が確認でき、このあたりが浮世絵と類似する景観であると言える。

一方で、人体に対して船の規格が過大であるため、船の大きさはインパクトを重視した誇張であると言える。

【図二十一】現在の様子（令和七（二〇二五）年三月三十日伊藤大生撮影）



（八）歌川広重（二代）《諸国名所百景 若狭かれるを制す》【図二十二】

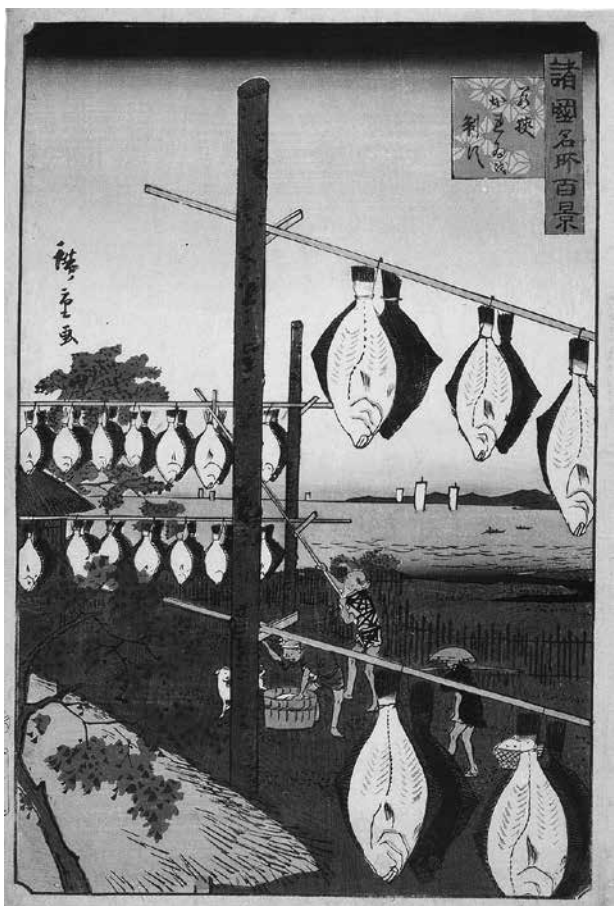
一面 木版色摺 安政六（一八五九）年

福井県立美術館蔵

若狭鰯は前述の『日本山海名産図会』において「淡乾の品多しといえども是天下の出類雲上の珍美と云べし」と称される名品として知られていた。現在でも小浜で水揚げ、天日干しされ、皇室にも献上されている。

本作では、海の内こうに山や、海からほど近い場所に茅葺屋根の家屋が描かれている。明治二六（一八九三）年の地形図でも同様に、小浜町において海の近くまで宅地が広がっている景観が見取れる【図九】。こうした様子は現地においても同様であり、さらに現地では本作と同じく海の内こうに山も確認できる【図二十三】。海の内こうに山が見え、海の内くまで宅地が迫る景観は、浮世絵と類似していると言える。

【図二十二】





【図二十三】現在の様子

（令和七（二〇二五）年三月二十八日伊藤大生撮影）

（九）歌川広重（二代）《諸国六十八景 若狭松尾山》【図二十四】

一面 木版色摺 文久二（一八六二）年

福井県立美術館蔵

江戸時代の諸国から、それぞれ一か所ずつ名所を描いた本作で、若狭からは「若狭松尾山」が主題とされた。本作のように、画面の中央に大きく山を描く構図は、伝統的な山水画の構図を用いていると言える。

双耳峰をなす山の形状から、本作に描かれた山は青葉山であろう【図二十五】。小浜藩士が著した元禄六（一六九三）年の地誌である『若狭郡県志』では「青葉山」の名称が確認できる。しかし、主題が「松尾山」となっているのは、正徳三（一七一三）年に発刊された貝原益軒の紀行文『諸州巡覧記 西北紀行』の中で「松尾山」と記されており、これを踏襲したためと推察される。また、青葉山に

【図二十四】





【図二十五】青葉山

写真提供：福井県公式観光サイト ふくいドットコム

は中腹に三十三所の観音霊場のひとつ「青葉山 松尾寺」があるため、これに影響を受けた可能性も考えられる。明治二十六（一八九三）年の地形図からは、本作にも描かれているように、青葉山の麓に傾斜地に囲まれた漁村や入江が散在している様子を見て取ることができる【図二十六】。双耳峰をなす山の形状のほか、漁村や入江の地形など、浮世絵と実際の景観が類似する箇所が確認できると言える。



【図二十六】三万分一地形図「青葉山」「高浜」(部分)

明治二十六（一八九三）年測量

福井県立歴史博物館蔵

〔十〕歌川広重（二代）《諸国六十八景 越前等伎坊》〔図二十七〕

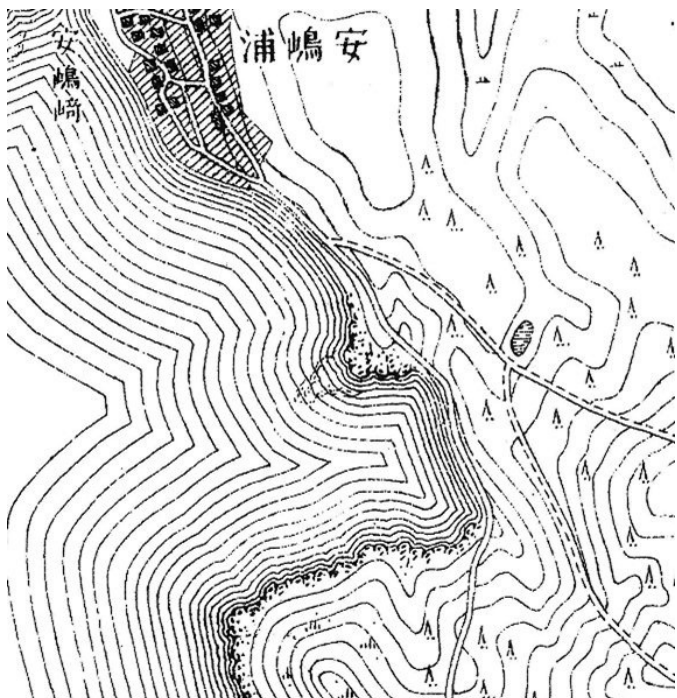
一面 木版色摺 文久二（一八六二）年

福井県立美術館蔵

本作は二代広重が初代広重の作例をよく学び、また自身の『諸国名所百景』から焼き直しの形で描いた図の多い揃物。現在も観光地として有名な「等伎坊」（東尋坊）が描かれている。

注目すべきは、現在観光で訪れた際に目にするような、崖の先端からの景観ではなく、崖を横から見た景観を描いている点と、描かれている景観が現在の景観と類似している点である。東尋坊周辺を描いた明治三十二（一八九九）年の地形図を見ると〔図二十八〕、東尋坊の崖の先端まで続く道が確認できず、また細かい等高線が引かれていて急傾斜地であったことが分かり、崖の先端に行

〔図二十七〕



〔図二十八〕二万分一地形図「安島浦（部分）」

明治三二（一八九九）年修正

福井県立歴史博物館蔵

くことは容易ではなかったことがうかがえる。本作に描かれたような景観は、現在は整備された遊歩道を下っていくことで見ることができ。しかしかつては船によって崖下に訪れることで見ることができたものと思われる。現在にも続く船の上からの観光が、江戸時代から行われていたことが推察される。また、海底から隆起している岩石の分布状況というような、言語化が難しい現在の景観が類似していることから〔図二十九〕、現地を観察した、もしくは詳細な種本をもとに本作の制作を行った可能性が示唆される。

このほか、展覧会では歌川豊国（三代）《見立閣づくし 廊のやみ 三国小女郎》



【図二十九】現在の様子（令和七二〇二五年三月三十日伊藤大生撮影）

【図三十】も展示し、その背景に描かれた旅籠と見比べるため、現存する三国の旅籠【図三十一】を紹介した。しかし、浮世絵の主題が人物であることから、景観の比較までは立ち入らなかった。



【図三十】歌川豊国三代《見立閣づくし 廊のやみ 三国小女郎》（二面 木版色摺 安政二（一八五五）年）  
福井県立美術館蔵



【図三十二】現在の様子（令和七（二〇二五）年三月三十日原田礼帆撮影）

#### おわりに

本稿では、越前若狭を題材に取る浮世絵に描かれた場所について、現地調査結果を報告した。全体を通しては、現地に訪れずに描いたものが多いとされる浮世絵であるが、意外にも現地の景観と類似する箇所があることを確認できた。しかし一方で、取り分け初代広重と二代広重が同じ場所を描いた「三国」と「若狭」は、主題の捉え方と視点の違いが浮き彫りとなった。どちらも同地の名物を版本などより得た情報に具体的に示そうと試みているが、二代広重は「船」「鰯」といった景物に主眼を置き、実際の景観よりもインパクトをより重視した構図を生み出していると考えられる。冒頭でも述べたとおり今回は現地調査が主眼となり、深い考察が叶わなかったことが悔やまれる。

今回の調査と展覧会を通して、江戸時代の越前若狭に思いを馳せると共に、浮世絵を通して現在の福井を見ることで、現在にかけて変化してきた、あるいは今もなお変化せずに残る地形や道などの景観を振り返る機会を得た。かつての姿を現在に伝える浮世絵は、絵画としての面白さのみならず、その背後にある人々の歴史をも想起させる。本稿での結果報告は最終結果というわけではなく、今後も調査を続け、報告を行いたい。

#### 註

1 当館ホームページ記載の作品解説、後述の美術館日より、『福井県史』などで、数点に関する個別の論述はなされている。

2 《京都名所》において『都名所図会』や『都林名勝図会』などを参照（『全集浮世絵版画6 広重』集英社、一九七一年）。

3 阿部美香「文化的な風景の研究における浮世絵・木版風景画の検討と妥当性」〔地域と環境〕研究会編（12）二〇一二年、一一一―一二〇頁）。

4 福井市史編さん委員会編『新修福井市史 I』福井市、一九七〇年、九二二頁。  
5 前掲註4、二九四頁。

6 福井県編、発行『福井県史 通史編4 近世二』一九九六年、二五一頁。  
7 前掲註6、二五四―二五五頁。

8 木内信蔵編『わが国土3』講談社、一九六一年、二二六―二二七頁。

9 小葉田淳監修『福井県の地名 日本歴史地名大系18』平凡社、一九八一年、四八九頁。

10 杉原丈夫編『新訂越前国名蹟考』松見文庫、一九八〇年、一六一頁。

11 前田詩織「コラム 浮世絵に描かれた福井」(『美術館だよりvol.160』二〇一九年、福井県立美術館)。

12 ①福井県文書館「献上うに・かに」(福井県文書館月替展示)、二〇一〇年、

<https://www.library-archives.pref.fukui.lg.jp/fukui/08/m-exhbt/201009AM/201009.html> 二〇一六年二月一日アクセス。

②福井県文書館「季節の一品、いただきます——江戸時代のふくいのお食——」(福井県文書館三月・四月月替展示)、二〇二〇年、

<https://www.library-archives.pref.fukui.lg.jp/fukui/08/m-exhbt/20200221AM/20200221AM.html> 二〇一六年二月一日アクセス。

13 前掲註7

(はらだ あやほ・福井県立美術館)  
(いとう だいき・福井県立歴史博物館)